

# ヒエラルヒー

— 邂逅 PART 2 —

熊岡まもる



Graphic ; ONAKA

## 邂逅・あらすじ

受験生の葛城涼は、気分転換で訪れた札幌の地下街で、偶然、クラスメイトの水島由紀を目撃する。由紀はラブホテルに消え、そこに学校の数学教師の久米島光治が入っていた。同じ頃、涼は謎の女、城崎文と出会う、かつて涼の父の部下だった彼女は、涼が超人の父親になるように遺伝子改造された子であると告げる。そして同時に、涼は攻撃性に性衝動を感じるように遺伝子を改造されているとも告げた。さらに、涼と同時期に誕生した被攻撃性に性衝動を感じるよう遺伝子改造された女性こそ涼の伴侶となるべき女性だと。とまどう涼。一方、由紀は久米島との逢瀬を重ねているようだった。由紀の後をつけ、文とともにラブホテルに入った涼は由紀と久米島がSMをする関係であることを知る。久米島を殺そうと思った涼は、久米島をホテルで待ち伏せるが、現れたのは久米島と音楽教師の冴木怜子だった。久米島がSとして由紀と付き合い、同時にMとして怜子と付き合っていることを知った涼は、久米島を殺す気が失せる。由紀に久米島の行状を話すが、由紀は久米島が自分にやさしくしてくれるのならかまわないと言ひ、涼にもう口をきかないと告げた。涼は、事の次第を文に話し、文がふだん生活している東京の大学を受験するように勧められるのだった。

(JURRA 27号掲載)

## 1

葛城涼が、その言葉の意味を知ったのは、大学受験のための特別講習でのことだった。

世界史の講習でのことだ。

「ヒエラルヒーとは、一言で言うと、社会的な階層のことだ」  
 中年だが、どこか若々しいところもある世界史の教師は、受験のための要点整理の合間に、いわば息抜きとして述べた。

「日本では、ヒエラルキーという言葉の方が一般的だが、もともとはヒエラルヒーと言う。原形はヒエラルキア。カトリックの聖職の位階制度のことを言った。そこから転じて、社会一般の政治的、経済的、宗教的な階層のことを言うようになった」  
 涼は、最初、その話に興味はなかった。ただの脱線だろう、くらいに考えていた。教師は話しを続ける。

「ヒエラルヒーの典型的な例は、フランス革命前の社会制度だろう。貴族、僧侶、平民と確固たる身分制度が存在していて、その壁はなかなか乗り越えられなかった。フランス革命が起こった要因には、経済的なものも挙げられるが、こうした因習的な身分制度を打破して、自由に職業が選べる社会を目指すという側面もあったことも否定できない。

近代の歴史の中で、ヒエラルヒーは否定され、固定的な身分制度は打破されたかに見える。しかし、本当にそうなのか？」  
 涼は顔を上げた。

「ヒエラルヒーとは、実は、人類の歴史に普遍的に現われるものなのではないか。たとえば、君たちも経験しているのではないかとと思うが、クラス委員になるような人間はおのずと決まってくるのではないか。そういう印象はあるのではないかね？」  
 そう言つて教師は、講習を受講している生徒たちを見回した。たしかにそうだ。

涼は思った。

自分は、高校の三年間、クラス委員はやったことはないが、そういう役員をやる生徒には共通する素質のようなものがある。それは、生徒会の役員をするような生徒についても言えることだ。

人の上に立つ、生来の素質。

そういうものが、やはり存在しているのではないか。

涼は、興味を覚えた。

教師はさらに続ける。

「こうした例は、日本の場合、政治の世界において顕著に見られる。日本の政治の世界、いわゆる政界には、二世議員、三世議員が多い。親が政治家だったから子供も政治家にならなければならぬ必然性はどこにもないが、幼い頃から政治家の息子、娘として通っていると、いつしか周りからリーダーシップを發揮することを求められるようだ。そのような、二世、三世たちは、幼い頃からリーダーと目されて成長してくるうちに、知らず知らずのうちにリーダーシップを發揮するやり方を学んでい

って、親のあとを継ぐ。かれらは、いわば、無意識に上級のヒエラルヒーに置かれている存在だと言つてもいいのではないだろうか。上級、下級のヒラルヒーは、持つて生れた環境によつておのずと決まってしまうのではないか」

教師は、脱線が過ぎたと思つたのか、その話はそれで切り上げて、講習に戻つた。

涼は、その話を印象深く聞いた。

SとM——サドとマゾも、ヒエラルヒーの一種なのだろうか。そう言えば、誰がSとなり、誰がMとなるのかは、もしかすると、育つた環境によつて半ば先天的に決まってしまうものなのかもしれない。

そのとき、涼は衝動的に、水島由紀を犯したくなった。

それも、縛つて、辱めて、叩いてから、時間をかけて犯したくなった。いわゆる、責めたくなくなったのだろう。

由紀はこの講習は受けていなかった。

どうして、そんな思いが湧いてきたのかはわからなかった。

自分は、由紀のことがあきらめ切れないのか。

由紀は、数学の教師である久米島光治と関係を持っていた。SMをする関係だった。由紀は久米島の性奴隷だ。そして、久米島は一方で、音楽教師の冴木怜子とも関係している。こつちでは、怜子が女王で久米島が奴隷だった。

涼はその事実を由紀に告げ、久米島と別れるように言つた。しかし、由紀は、久米島が自分にやさしければ、誰と関係して

いてもかまわないと言った。

由紀に、久米島のことを告げたのは、由紀を救いたいなどという格好のいい動機からではなくて、単に、自分が久米島に取って代わって、由紀を奴隷にして責めたいからなのだろう。

ぼくは、由紀のことが好きだ。でもそれは、由紀の身体を責めたいからだ……。

その思いは、折に触れ、涼の胸に去来した。

涼は由紀の秘密を知ったのと同じ時期に、自分の出生の真相を知った。

遺伝子の改造によって、異性への攻撃性を高められた人間。

それが涼だった。涼は、異性を攻撃することで快感を覚えるよう、先天的に刷り込まれていた。

そのことを涼に告げたのは、城崎文しろさきふみという女だった。文は、以前、涼の父の助手だったと告げた。涼の父は生物学研究所に勤めていたことがあり、人間の潜在能力と遺伝子に関する研究をしていた。

涼は、父が自分の精子と母の卵子を人工授精させ、さらに遺伝子を改造して生れた子だった。その改造の際、異性への攻撃によって快感を得るように、さらに改造を加えたのが城崎文だった。

涼は突然の文の申し出に当惑したが、由紀にふられたとき、その、遺伝子を改造されたという自分の運命を受け入れることが出来る気がしていた。

受験生の涼は、文の勧めに従って、ここ、札幌の私立成和せいわ学園高校から、東京の大学を受けようと決意を固めて勉強にはげんでいるところだった。

しかし……。

涼は、いまだに由紀のことが気になっていた。

由紀が、久米島と逢瀬を続けていると思うと、たまらない気がした。

自分も、由紀を責めたい。久米島に取って代わりたいという思いは、日に日に強くなっていくように感じられた。

## 2

涼が由紀に関するその噂を聞いたのは、十一月の中旬、札幌が秋から冬へと舞台を転換させる季節だった。

涼は、受験のために毎日放課後、学校の図書館で勉強していた。おそくまで残るため、最後の利用者になることもあった。

ある日、やはり最後の利用者になった。帰りがけに受験の参考にしようと、歴史に関する読み物の本を借りようとしたときだった。

「葛城涼くんでしょう？」

『西洋音楽史夜話』というその本の貸し出し手続きを終えてからカウンターの間に一人いた、図書局員の女子生徒が言った。

涼は、そのとき、どこかで見た顔だと思った。しかし、涼の

クラスや隣のクラスの子ではない。

その子は、髪をポニーテールにまとめ、ぼつちりした両眼が特徴的だった。背は涼より低い。

「三年C組の葛城くんよね。わたし、三年E組の大滝博士おおたきひろこ」

「……どうして、ぼくのこと、知ってるの？」

「よく、図書館に来て、たまに本を借りるでしょう。だから知ってるの。それにね、わたし、水島由紀の親友なの」

涼は、どう答えるべきかわからなかった。

そして、次の瞬間、この博士という子をどこで見かけたか思い出した。

クラスに友達が少ない由紀が、親しくしているほかのクラスの友人の一人だ。

博士は、両眼をいたずらっぽく輝かせて、涼を見た。

「わたし、知ってるのよ」

「何を？」

涼の声はくぐもったものになった。

「あなた、由紀の秘密を知ってるんですってね」

涼は一瞬、両の目を細めた。

自分以外に由紀の秘密——久米島とのSMのことを知っている人間がいる。そのことは、十分な用心に値する。

「秘密って？」

「由紀と久米島先生のことよ」

そう言うと、博士は唇をかすかに曲げて笑った。

「由紀が言ったのよ。秘密を嗅ぎつけて、そのことをタネに話しかけてこようとする男子がいるって。本当に迷惑だったね」

涼は自分が唇をゆがめているのがわかった。

「秘密を知っているのが、あなた——葛城涼くんだって話してくれたのは最近のことよ。わたしが、葛城くんが最近よく図書館に来てるって気づいたのもね」

「何が言いたいんだい？」

涼は緊張を解かずにはたずねた。

「あなたに、教えてあげたいことがあってね」

「……」

何を知らせようというのか？

「由紀、最近、うれしそうだと思わない？」

涼は、由紀にふられてから、つとめて由紀の素振りを気にかけまいとしてきた。しかし、最近その努力がむなしものだったと悟るようになってきていた。それほど由紀のことは涼の胸を占めていた。

たしかに、由紀は最近少しようすがちがうような印象を与えていた。日頃無表情だったが、笑みを見せることが多かった。

ただ、取り立てていつもほがらかだというわけではなく、涼も、そんなこともあるのかと思っていた程度だった。

「由紀ねえ、いいことがあったのよ」

「……」

こつちが聞きたいと言ったわけでもないのに、一方的に親友

の事情を話してくる。どんな女なんだ、こいつは？

「久米島先生がね、由紀が卒業したら、いっしょに暮らそうって言うてくれたんですって」

卒業したら、由紀と久米島が同棲……。

涼は思わず、息を飲んだ。

「由紀の家って、複雑な家庭らしくてね。今の父親が実の父親じゃないんですって。だから、早く家を出たいっていつもこぼしてたわ」

涼は、由紀とは二年、三年と同じクラスだったが、そのことは知らなかった。由紀が、いつも影のある印象を与えるのも、そんなことに原因があるのかもしれない。

しかし、この女、本当に何が言いたいのだ。

「それで？」

「由紀は、卒業してから久米島先生と暮らすことになったのよ。だから、あなたが由紀をどんなに思っているにも無駄なのよ」

「水島さんのことは、なんとも思っていないけど」

嘘だった。

しかし、それは、涼のプライドが言わせた嘘だった。

よく知らない女の子に、弱味を見せたくないという警戒心も作用していた。

「そお？ でも、由紀、あなたが教室でも、ときどき見つけてるって、言うてるけど？」

それは、事実だった。

涼は由紀への思いを断ち切れずにいた。だから、教室でも、つい由紀を見つめてしまうことがあった。

「水島さんの勘違いじゃないかな」

「それならいいんだけど。ただ、あなたがまだ由紀に気が残っているのなら、それは無駄だってはつきり教えてあげたくて、話しかけたのよ。手間をかけたわね。ごめんなさい」

どうやら、話から解放されたようだった。

「じゃ……」

涼は、借りた本を持つと、カウンターから離れた。座っていた席に戻り、自分のスポーツバッグに借りてきた本をしまいこんだ。そして、椅子にかけてあったコートを手にとると荷物を持って図書館から出た。

図書館から正面玄関へ向かう廊下を歩きながら、だんだんと自分の心がおだやかでなくなっていくのを感じていた。

卒業したら、由紀が久米島と同棲する……。

久米島には冴木怜子という恋人が別にいる。それなのに、由紀と暮らすのだろうか？

歩く速度はだんだん速くなっていった。

正面玄関に着く頃には、走り出したい思いにかられていた。コートを着て、靴を履き替え、玄関を出た。

外はもう薄暗くなつており、木枯らしが頬に吹きつけた。

地下鉄の駅に向かいながら、涼の頭の中では、由紀のことがずっと渦を巻いていた。

その晩はよく眠れなかった。

涼はベッドの中で、なんども寝返りを打った。

自分は由紀のことを忘れようとつとめた。しかし、それは出ていない。どうすればいいのか？

自分の部屋の中の、闇を見つめながら、涼は途方に暮れていた。

由紀のことをどれほど思っても、将来性はない。

きつぱり諦めてしまうのがいいことは、はっきりしている。

そうした方がいい。今は受験に集中すべきだ。

涼の理性はそう言っていた。

しかし、自分の中のもう一人の自分は、なんとか由紀を自分のものにしたいと訴えていた。

結論は出なかった。

由紀は、久米島に支配されている。そして、久米島は、冴木怜子の支配を受けている……。

胸の内に、響くものがあつた。

涼の脳裏に、一つの結論が形を作った。

両眼を閉じた。

自分のたどり着いた考えを反芻する。

われながら、いい考えだと思った。

涼は、闇の中で、眠りの訪れを待った。

涼が、城崎文に連絡を取ったのは、翌日のことだった。

放課後、図書館にも寄らず、まっすぐ家に帰ってきた。着替えて一息つくとき、自分の部屋にこもった。

自分の机に向かい、携帯電話を取り出す。

文の携帯の番号は、登録してあつた。しかし、受験勉強に力を入れるようになってからはかけていなかった。

どきどきする。

携帯の「電話帳」から相手先を選ぶと、発信した。

呼出音が鳴る。

一回、二回、三回……。

五回目で相手が出た。

「もしもし、文さん？」

涼はおずおずと話し出す。

「葛城涼くんね。しばらくね。どうしたの？」

「相談に……のってほしいんだ」

文は、一瞬黙った。しかし、涼が何か決意をして電話をかけてきているのを感じたのか、かるく息を吐いてから話し出した。

「いいけど、あなた受験勉強の最中じゃないの？」

「気なっていることがあって、勉強が手につかないんだ」

「由紀さんのこと？」

「……それもある」

「それも？ ほかにもあるの？」

「ある女の人を、ぼくの自由にした」

その言葉を聞いた文が、電話の向うで、かすかにほくそ笑みでいるのが、涼にはわかった。

「自由にするって？」

「縛って、自分の思うとおりに扱いたいんだ」

「そういう気になってきたのね」

文は、こころなしかうれしそうだった。

「いいわ。ガリガリ勉強ばかりするのだけが能じゃないものね。ところで、その自由にしたい女の人って、由紀さんのこと？」

「それは……今は言いたくない」

「わかった。だったら聞かないわ。わたしに何をしてほしいの？」

「女の子の、縛り方を教えて欲しい。それに、その……何て言うか、責め方も……」

「いいわよ。およばずながら、わたしの知識と技術を伝授するわ。いつ会いましょうか？」

「この次の日曜日はどうかな？」

「オーケーよ。この前、話しをした公園の駐車場で待ち合わせるのはどう？ そこで落ち合って、私の車でホテルに行くというのは？」

「それでいいよ」

「ホテルは、この前のベータ・インでいいかしら。たいしたホ

テルじゃないけど、値段が安いから」

「かまわない」

「待ち合わせの時間は？ やつぱり午後がいいかしら？」

「そうだね。午後一時ごろならちようどいいんだけど」

「わかったわ。公園に着くくわしい時間が決まったら電話して。車で行って待っているから」

「じゃ、頼むよ」

「いいわよ。わたしも楽しみになってきたわ。じゃあね」  
それだけ言うと、文は電話を切った。

涼は、さっきまでとは打って変わって、気分が爽快だった。自分の考えが実行できる……。

今晚は、昨日とはちがつてぐっすり眠れそうだった。

#### 4

次の日曜日は、どんよりとした曇り空だった。

涼は公園のそばまで行くバスの時間を調べ、土曜日の夜に、もう一度、文に電話を入れた。

約束の時刻は、午後一時二十分頃だった。

家族には、気分転換に札幌の街をぶらぶらしてくると言って、家を出た。

公園のそばまで行くバスは、涼のほかには二人しか乗ってなかった。涼は、座席に腰かけながら、胸が高鳴っていくのを



感じていた。

公園の近くのバス停では、降りたのは涼一人だった。

寒々とした曇天の下、文の赤い軽自動車は待つていた。

文は、黒いコートを着て、サングラスをかけていた。

「お待たせしました」

涼は軽自動車の助手席の扉を開けて言った。

「こんにちは」

文はサングラスをはずして、にこやかに応じた。

「今日は、どうもすいません」

「いいのよ。あなたが、女を責めることに興味を持ってくれるようになったら、わたしもうれしいのよ。じゃ、行くわよ」

文は車を発進させた。

S Mホテル、ベータ・インは空いていた。

日曜日のせいなのかな……。

涼は、文のあとについて、部屋の入りながら思った。

以前何回か入ったことのある部屋とは別の部屋だった。比較的大きな部屋だということにはわかった。

部屋に入って、文が空調を調節したりしている姿を見ているうちに、急に胸が高鳴ってきた。これからすることを考えると、

心臓がどきどきした。

「じゃ、まずシャワーを浴びましょうか」

文が言った。

「はい」

「いつしよに入りましよ」

文は笑顔で言い放った。

いつしよに、シャワーを浴びる……。

胸の高鳴りはさらに早くなった。

「どうしたの？ いやなの？」

「いえ、そうじゃないんですけど……」

「しつかりなさい。女の人とエッチする前には、シャワーを浴びるのがエチケットよ。二人でシャワーを浴びるっていうのは、いわば前戯で、もうすでに行為は始まっているのよ。さあ、脱ぎましょう」

文はコートを脱いで、部屋に作り付けのロッカーに掛けると、着ている服を脱ぎ始めた。文は、グレーの上下のスーツに、白いブラウスを着ていた。ジャケットを取ると、ブラウスのボタンをはずし始めた。

「ほら、何しているの。早く脱いで」

涼も、おずおずと服を脱ぎ始めた。母親と妹以外の女性の前で裸になるのは、初めての体験だった。裸になると、無意識に前を隠した。

文は、服を着た外見からは想像できない、豊満な肉体の持ち主だった。着痩せするタイプなのだろう。白い、豊かな胸と、黒々とした鬚りのある下腹部に目が行った。

「行きましょう」

部屋に作り付けのロッカーの中に、プラスチック製の黒い籠

が置いてあった。籠には黄色いタオルが何枚か折りたたまれて入っていた。

文は籠を持つと、先に立って浴室に向かった。そして浴室の入り口のそばに、籠を置いた。

浴室は、ひんやりしていた。

ラブホテルの浴室が、こんなに狭いものだというのは初めて知った。

文は、シャワーからお湯を出して、温度を調節すると、お湯の出ているノズルを涼にわたした。

「さっと浴びて。あとで身体を洗ってあげるわ」

その言葉に、涼の胸はさらに高鳴った。

前と背中にお湯を浴びると、文はノズルを受け取り、自分もお湯を浴びた。いったん、シャワーを止めると、涼を浴室用の椅子に座らせる。そして、浴室に備え付けられたボディシャンプーを少量出して泡立たせ、涼の局部こすり始めた。

「はっ」

思わず息を飲んだ。

下半身は、もう十分勃起していた。

すべて任せればいいんだ……。

そう思い込もうとしたが、心が千々に乱れるのを押しとどめることは出来なかった。

「だいぶ元気になってるみたいね」

文は、笑みを浮かべながら言った。

下半身を十分泡で洗うと、シャワーを使って流した。

「先の上がっついていて。籠の中に、湯上り用のタオルと部屋着があるはずだから、身体を拭いて着ていて。風邪をひかないようにね」

「はい」

涼は、おずおずと文の指示に従った。

タオルにはフェイスタオルと湯上り用のバスタオルがそれぞれ二枚ずつあった。涼は、身体をごしごし拭いた。タオルの下に、青とピンクの簡単な部屋着がたたんで置いてあった。涼は、青い方を羽織った。

文は、一人で身体を洗い、念入りにシャワーで流しているようだった。

涼は部屋に戻り、置いてあった二つの椅子の一つに腰かけた。かたわらの壁を見ると、フックがいくつか付いており、そのフックに、丸く整えられた茶色いロープや、目隠しに使うとおぼしきアイマスク、それに何に使うかわからない小さな羽根のついた棒などが掛けてあった。

「お待ちせ」

文がピンクの部屋着を羽織って戻ってきた。

「さあ、じゃあはじめましょうか」

「はい。おねがいます」

文は、涼の顔をみてふっと息を吐いた。

「そう固くならないで。まず、縛りを教えるわ。女を縛るのは、

いわゆるSMの基本だからしつかり憶えてね」

「……はい」

「まず、わたしがあなたを縛って見せるわ。よく見て憶えて」

そう言うと、文は壁に掛けてあったロープを手に取り、ほどき出した。ロープはけっこうな長さになった。

「部屋着、脱いで」

涼は部屋着を脱いで全裸になった。局部は少し萎えていた。

「両手を後ろに回して組んで」

言われた通りにする。

「両手で反対の手首をしつかりつかんで」

そうすると、文はロープを手首にかけて縮めた。

「言っておくけどね」

文は作業を続けながら言った。

「縛りっていうのはね、縛られる方の協力がないとまともには出来ないプレイなのよ。イメージ的に、力の強いSが一方的に力の弱いMを縛るっていう印象があるかもしれないけど、それは間違いよ。第一、縛っているときに縛られる方がじっとしていてくれないと、まともに縛れないでしょう？ 縛りに限らず、SMっていうのは、SとMの協力関係で成り立っている作業なのよ。協力関係があった上で、そこから生まれる快楽を貪るのがSMのよろこびなのよ」

文の話を、涼は意外に思った。

SMを一方的な快楽だと考えていたことは間違いなかった。

自分の快楽ばかり追い求めていたのだった。

「でも、ぼくが快楽を感じる（攻撃性）というのは……」

「あなたの場合は、もっと普遍的な（攻撃性）に快楽を感じるのだと思うわ。それが、いわゆるSMプレイのような、約束の上で行われる（攻撃性）にでも、快楽を見出すことが出来ると思うわ」

自分の遺伝子を改造した人間の言うことなのだから、間違いないだろう。そんなものなのだろうか。

「さあ、出来たわ」

文は、涼の上半身を縛り上げていた。

後ろ手に組まれた手首を縛ったロープは、胸から首にかけて回され腰で最終的に結ばれていた。

「縛りのポイントはね、SMって縛り上げてからいろんなことをするわけなんだけど、そういうこと、つまり責めている間に、ロープが緩んでこないってことが大事なの。責めへの集中が途切れないことね」

そういうものか。

5

「縛り方はだいたいわかったかしら？」

「はい」

「じゃあ、ほどくから、今度はあなたがわたしを縛ってみて」

文は、すばやく結ばれたロープを解いた。

拘束から開放された涼は、手首をさすりながらロープを受け取った。

文は部屋着を脱ぎ捨て、涼の方へ背中を向けると、後ろ手に両腕を組んだ。涼は、見よう見まねで縛り始めた。

「もつと締めるところはピシッと締めて。そんなんじや、あとで緩んでくるわよ」

ときおり叱責を受けながらも、何とか縛り上げることが出来た。

「はじめてにしては、まあまあね。じやあ、このまま、わたしを責めてみて」

「……」

涼は絶句せざるを得なかった。

責めると言っただって、一体どうしたらいいのか。

文は、そんな涼の困惑を見透かしたようだった。

「むずかしく考えないで、好きにしていいいのよ。さあ」

文は、縛られた身体を涼に向けてきた。

涼はごくりと唾を飲み込むと、両手を伸ばして、文の両の乳房を包んだ。触ってみる。やわらかい。指先に力を込める。

「いいわよ。遠慮しないで、もつとやっていいのよ」

文の言葉は涼の背中を押した。

思わず両手に力を込めて、文の乳房を揉みしだいた。

「ああっ」

文も声を上げた。

さらに激しく揉む。

「ああっ……あああっ」

涼の身体は自然と動き、前に出て、文の唇に自分の唇を重ねた。文は口づけしながら、涼の口へ舌を差し込んできた。涼も同じように応じた。

これがデープキスって言う奴なんだろうな……。

頭の中をそんな思いがよぎった。

生まれて初めて異性とのキスだったが、思いの外スムーズに行った。

重ねられた二人の唇の端から唾液が漏れてきた。涼は、両手の人差し指で文の乳首を転がした。柔らかいが、ぷくつと屹立した乳首はいじられると、ますます強く立っていくようだった。

涼は唇を離し、今度は少し腰をかがめて文の右の乳首を吸った。舌先で乳首をもてあそぶ。

「あうっ……いいわ」

文が声を出した。

「歯で、かるく噛んで」

懇願なのか指示なのかはわからなかったが、涼は文の言葉に従うことにした。右の乳首を歯でかるく噛む。

「あああああうっ」

文はひととき大きく声を出した。

文もよろこんでいることは、はっきりわかった。

今度は、左胸を責める。同じように乳首を舌でころがし、か  
るく噛む。さらに、右と言わず左と言わず、両の乳房を舐め回  
す。そして、涼は、乳房と乳房の間に顔を埋めた。

「……下も責めて……」

大きく息を次ぎながら、文が言った。

涼は視線を落とし、文の黒々とした茂みに手を伸ばした。触  
つてみると、陰毛はやわらかかった。

右手の人差し指と中指で、文の局部をまさぐる。下半身の茂  
みの中から、女の割れ目を探り当てた。やわらかい肉の口を押  
し広げる。透明な樹液が滴り落ちるのがわかった。

「指……入れてもいいですか？」

涼はたずねずにはいられなかった。女の神聖な領域を犯すよ  
うな気がしたのだった。

「……いいわ。はやくして……」

涼は右手の人差し指と中指をゆっくり文の秘裂に挿入してい  
った。秘所は十分に潤んでおり、指はスムーズに入った。文の  
あの部分は、入り口は狭いが奥は広くなっていた。女のあそこ  
に指を入れていと思うと、それだけで興奮した。文の濡れた  
粘膜は涼に快感をもたらし、文との一体感が得られた。涼は、  
二本の指を動かした。

「ああうっ」

文はまた声を上げた。

その声が刺激になって、涼は指を激しくピストン運動させた。

文の、女の体液がしとどに噴き出すのがわかった。

「……ああっ……気持ちいい……」

さらに力が入り、動きは激しくなる。

「……ああうっ。いく、いくわ……」

女がエクスタシーの達するのを、(へい)というのは、涼も知  
っていた。しかし、目の前で女が本当にいつてしまうというの  
は、はじめての体験だった。こんなに簡単にいつてしまうもの  
なんだ、というのが正直な感想だった。

「……ああ、いく、いく」

文は次の瞬間、まるで小便を漏らしたかのような量の愛液を  
局部から噴き出した。

「はあっ」

文はうなだれて息をついた。

「たくさん出たんで、驚いた？」

顔を上げた。

「はい」

「これが、(潮吹き)って言う奴よ。こういう体質の女もいるわ。  
いつでも大量に潮を吹いてしまう人もいるけど、場合によって  
吹くときと吹かないときがある人もいるわ。わたしもそうね」

「女の人って凄いですね」

「そうね。たしかに、女は凄いわ。でも、その女を、あなたは  
征服しなくっちゃ」

たしかにそうだった。

「さあ、ベッドに行きましよう」

そう言うと、文は部屋の四分の一を占めるダブルベッドの方へ行った。

「掛け布団を取って床に落として」

言われた通りにする。

「ラブホテルでは、掛け布団は汚さない方がホテルに対して親切なのよ。それに邪魔でしよう？」

そういうものなのか。

文は縛られたまま、ベッドに上がった。

「さあ、いらっしやい」

涼はまた、ごくりと唾を飲み込んだ。

自分もベッド上がる。

「スパンキングを教えてあげるわ」

「スパンキング？」

「聞いたことないわね。SMプレイの一つで、お尻を叩くことよ。西洋にはパドルっていつてお尻を叩く専用の道具もあるのよ」

「よ」

「奥が深いんですね」

「そうね。今日は手で叩いてみましょう。じゃ、正座して」

涼はベッドの上で膝を合わせて正座した。勃起している陽物

から液が漏れているのがわかった。文は、涼の両膝に、身体をうつぶせにして載せてきた。涼の左に文の頭を持っていき、尻がちようど右膝上に来た。

「叩いてみて」

文の尻は思っていた以上に形がよかった。肉感的な尻だった。

涼は、右手を上げて振り下ろした。

パン。

鈍い音だった。

「だめよ。もっと鋭く」

こんどは、もっと腕を高く振り上げて打ってみる。

パンッ。

「そうよ。もっと叩いて」

文の声にうながされて、何度も打ってみる。

パンッ、パンッ、パンッ。

「あうっ……いいわ。もっと……もっとよ……」

文の官能を感じているらしい反応を見ると、涼も一段と興奮してきた。文の尻に連打を浴びせていると、自分の本当に求めているのは、やはりこういう快楽なのかもしれないと思いはじめた。

「……あうっ。あ、あそこに指入れてかき回してっ」

涼は打擲するのを止めて、言われたとおりまた右手の人差し指と中指を文の秘部に挿入した。今度はさっきよりもさらにすべりよく入っていった。

手首を回し、さらに前後にも動かす。

じゅばっ、じゅばっ。

文の愛液にまみれた肉ずれの音が聞こえた。

「ああっ……あうっ。いく。また、いつちやうう……」

文の声は絶叫に近かった。

涼の膝の上で、文は絶頂を迎えていた。

見ると、文は両の目を閉じて放心状態だった。

文は微動だにしなかった。静かに息をついていた。

「わたしばかり気持ちよくなって、ごめんなさい」

しばらくしてから、目を開けて、ぼつりと言った。

「じゃあ、最後に、わたしをこのまま犯してごらんなさい」

「えっ」

「初めてなのね」

「……はい」

文は涼の膝からおりると、ベッドの上に仰向けになって大きく両足を開いた。濡れそぼった恥部が丸見えになった。

「さあ、やってごらんなさい。遠慮は無用よ。女を自分のものしたいのなら、決定的なところでは男のあなたが主導権を取らなければだめよ」

涼は決意を固めた。ここで文を犯し、射精しようと思った。また、そうでなければ自分の身体が満足しなかった。

自分のファロスを奮い立たせ、文の股間に挿入しようと近づいた。

「そうじゃないわ」

文は冷静にこちらを見ていた。

「ちゃんと入れるためには、わたしのあそこを、まず指で拡張なくちや。もちろん、ていねいによ。さあ、やってごらんなさい」

涼は息を飲み込むと、右手の親指と人差し指で毛に分け入り、<sup>ひだ</sup>襞をさぐった。そして二本の指で押し広げた。またラブジュースが滲み出ている。

「そうよ。そのまま入れて、ゆっくりとよ」

自分の股間を近づけて、屹立しているものを微小な空間の中に差し入れて行く。

「ああっ……そうよ。それでいいのよ。ゆっくりと、そのまま動かしてごらんなさい」

挿入の感触は快く、涼は今にも射精してしまいそうだった。それでも我慢して、前後に身体を揺らす。

「……いいわ。だんだん激しく動いて……」

文も身体を揺すり始めた。

二人の動きが合わさったときの刺激は、たまらなかった。

「ああうう」

涼は思わず声を上げた。精を吐出していた。

頭の中が真っ白になるという表現があるが、まさに今の自分がそうだった。

このまま何時間でもこうしていられる気がした。

「いっぱい出たわね。溜まつたのね」

文は微笑しながら声をかけた。

そして、接合していた身体を離した。

「縄、ほじいて」

後ろ手の縛られた背中を涼の方へ向けた。

涼はやっとわれに帰り、ロープをほどき始めた。ロープを解き終えると、文は両の手首をさすりながらベッドの枕元にあるティッシュボックスからティッシュを二枚取り出した。

「拭いてあげるわ」

そう言つて、涼の局部から白濁液を拭き取った。何回かティッシュを新しくして、汚れを始末してくれた。そして文は自身自身の女陰もよく拭いた。

「シャワー、浴びましょう」

そう言つて先に立った。

熱いシャワーを二人で交互に浴びながら、文は言った。

「女を自分の思い通りにしたいと思うなら、ある種の非情さも必要よ。関係を断ち切らなきゃならないときをふくめて、いつでも女に対して甘い顔ばかりしない方がいいわ。それは憶えておいて」

「わかりました」

「それから、知っていると思うけど、女と生でエッチすると妊娠の危険が伴うのよ」

涼はどきつとした。

「今日のわたしは大丈夫だけど、そういう危険もあることは忘れちゃだめよ。妊娠させたくない相手の場合には、必ずコンドームを使うこと、いいわね？」

「はい」

まるで、教師と生徒だ。

涼は思った。

まあ、実際そんなものなのだけけど。

## 7

文との〈実習〉のあと、しばらくの間、涼は他のことが考えられなかった。

文との、いわゆるSMプレイとそれに続くセックス……。

思い出すたびに、狂おしい思いがこみ上げてきた。

自分の中で、何か変化が生じてきたのを感じていた。

しかし、受験生としての日常生活は続いていった。

涼は、また学校と家を往復する生活に戻った。

ときおり、文との〈実習〉を思い出しながらも、生活のリズムを整え、勉強に打ち込んだ。文との経験のような非日常の体験のある方が、日常の生活に打ち込みやすいような気がした。十一月が過ぎ、十二月になった。



札幌の街にも雪が降り積もった。

涼は志望校も決定し、センター試験のため追い込みにかかっていった。

そんなある日の放課後、やはり図書館で勉強していた。

図書館のカウンターに付いていたのは、あの、大滝博子だった。博子は、涼が図書館に入っていくと、ちらりとこちらを見たが、すぐに目をそらした。

図書館の大きな窓からは、粉雪が舞っているのが見えた。景色の窓のそばの席に陣取ると、勉強を始めた。今日は英語だった。文法の参考書を開き、受験用のノートに抄録する。とくに重要だと思われる内容の例文は暗記した。

雪は、勉強している間も降り続いた。

このぶんだと、帰りにはけっこう積もってるな……。

勉強の合間にそんなことを考えた。

十人近くいた図書館の利用者も、一人減り二人減りし、やがて涼ともう一人だけとなった。涼は勉強を終え、気分転換に読む本を少し物色した。短めのエッセイ集を借りることにした。

荷物を持って、カウンターに向かったとき、あらためてカウンター当番が大滝博子だと思いついた。

何も言われなければいいけど……。

そう思って、カウンターに本を差し出した。

「おねがいします」

小さく言う。

「はい」

博子は手早く手続きを行なった。

本を涼にわたすとき、涼の方をいたずらっぽく目を見た。

「葛城くん」

涼は黙って博子を見る。

またか……。

「帰りに職員駐車場へ行つて、久米島先生の車を見ていてもらなさい。面白いものが見られるかもよ」

小さな声でそう言うと、唇をかるく曲げて微笑した。

涼は本を受け取ると、荷物を持って足早にその場を去った。久米島の車に何があるというのだろうか。

気になった。

しかし、博子の言うとおりに行動するのは、なんだか癪しつだった。

だが、いったい何なんだろう。

由紀に関係することだろうか。

心が千々に乱れていくのがわかった。

図書館を出て、廊下を歩き、生徒玄関へ行く。持っていた黒いコートを着込み、靴を履き替えて、手袋をはめて玄関口から外に出た。外はもう暗くなり始めていた。今は雪は止んでいた。

地面には雪が二センチほど降り積もっている。パウダースノーだった。

涼は、一瞬、躊躇ちゆうちゆうしたが、校舎の側面に面してある職員駐車

場の方へ歩きだした。

久米島の黒い軽自動車は、すぐに見つかった。車内には室内灯が点いていて、久米島が運転席に座っているのがわかった。

涼は、久米島の車から少し離れたところに停っているワゴン車の陰に身をひそめた。ときおり冷たい風が吹きつけた。

久米島は誰かを待っているのだろうか？

由紀だろうか？

そのとき、久米島の車に人影が近づいてきた。

茶色のコートを着た由紀だった。長靴を履き、スポーツバッグを提げている。

由紀は、久米島の車のかたわらまで来ると、一瞬あたりを見回してから助手席の扉を開けた。

「おそくなつて、すいません」

そう言つて車に乗り込んだ。

久米島と由紀は、そのまま車内で少し話しをしているようだった。

やがて、久米島は室内灯を消して車を出した。車は、降ったばかりの粉雪を舞い上げて走り去った。

これから、あの二人はラブホテルにでも行くのだろうか。

時間が遅いとはいえ、学校で待ち合わせてデートするというのは大胆だと思つた。

涼は歩き始めた。

ときおり寒風の吹く中を。

学校の敷地を出たとき、また雪が降ってきた。

## 8

二学期の終業式の日。

涼のクラスの担任は、進学を希望している者は最後の決戦だと思つてがんばるようにと訓示を垂れた。

ホームルームの後は校内の大掃除で、各クラスが自分たちの教室のほかに学校内のさまざまな施設を分担して掃除することになっていた。今回、涼のクラスが担当するのは音楽室と音楽準備室だった。

「音楽室と音楽準備室の掃除に八人出さなきゃならないんだが、希望者いるか？」

担任は、面倒臭そうに呼びかけた。

涼はゆっくりと手を挙げた。

他に三名の手が挙げた。

「ほかにいないのか？」

もう一人挙げた。

男子二名、女子三名の計五名だった。

「三人足りないな。じゃ、次の者も行ってくれ」

そう言うと、出席番号の若い順に男子二名、女子一名の三名の名前を呼んだ。

「じゃ、頼むぞ」

涼は由紀の席の方をちらりと見た。  
由紀は、はやくホームルームが終わらないかと思っ  
ているようだった。

音楽室は、ふつうの教室より広がった。

壁や天井に音を吸収する防音材が張られていた。

音楽室は主に音楽の授業と音楽系の部活で使われていた。音楽の授業は、一年生と二年生のとき選択で履修する芸術のうちの一つだった。

涼は、芸術は美術を選択したので、音楽室は前を通ったことがある程度だった。

八人でぞろぞろと音楽室に入った。

「おれ、音楽の先生に言ってくるよ」

涼はクラスメイトたちに言うと、一人音楽室の隣の音楽準備室へ向かった。

冨木怜子は、音楽準備室で自分の机に向かいながら、ため息をついていた。

最近、恋人の久米島の態度がうれなかった。

SMプレイをしようかと誘っても、何かしら理由をつけて断ってきた。この一ヶ月、久米島とはデートもプレイもしていなかった。

怜子にはわかっていて。

久米島は、怜子のほかに水島由紀という生徒とも付き合っている。怜子は、久米島とは割り切って付き合っているつもりだったので、久米島がほかの女と関係を持っても意に介さなかった。

久米島は、きつと今、由紀に夢中なのだろう。

やはり、男は若い子がいいのか……。

そんなことを、とめどもなく考えていると自然とため息がこぼれた。

何か面白いことでもないだろうか。

ふと思いついて、机の私物を入れてある引き出しを開けた。中から、私物の譜面を取り出した。歌曲の譜面だった。声楽が専攻の怜子は、譜面を見て、その曲を歌っている自分をイメージすると、気分が落ち着いた。

今日は終業式も終わり、あとは音楽室と音楽準備室の掃除の監督をすればよいだけだ。そう思うと、少し気が楽になった。机の上に譜面を並べて、追っていく作業にしばし没頭した。

涼は、音楽準備室の扉をノックした。

「はい」

という声。

「失礼します」

そう声をかけると、涼は扉を開けた。

譜面が整理された本棚や、大小の楽器などが置かれた部屋の

窓際の一角に事務用の机があり、冴木怜子が椅子に腰かけて向かっていた。怜子は濃紺のスーツの上下を着ていた。

「何かしら？」

怜子は、机に向かったまま首を涼の方へ向けていた。

「三年C組の者です。掃除に来ました」

「ごくろうさま。よろしく頼むわ」

「はい。じゃ失礼しました」

そう言って、涼は音楽準備室を出た。

そして、音楽室で皆といっしょに掃除にかかりながら、今、一瞬見た、怜子の印象について反芻していた。

怜子の胸は大きかった。

スーツがはち切れそうに見えた。

きつと、両の手にはおさまり切らないだろうな……。

涼は思わず唾を飲み込む。

怜子の心象は肉感的という言葉がぴったりだった。

涼は、自分の考えていることが表情に出ないように気をつけながら、掃除にはげんだ。

掃除は三十分ほどで終わった。

涼は、もっぱら音楽室を担当し、準備室は女子たちに任せた。

「葛城くん、掃除全部終わったから先生に言ってきて」

自然とリーダー格になった女子が言った。

「わかった」

涼は、また音楽準備室の扉を叩いた。

「はい」

「失礼します」

扉を開けて入る。

室内は掃除を終えて小ぎれいになっていた。

怜子は窓際に立っていた。机の上には譜面が揃えて置いてある。

涼は二歩ばかり室内に入ると、報告した。

「掃除、終わりました」

「ありがとう。今、行くわ」

涼は、机の上の譜面に目を走らせた。

表題が印刷されていた。日本語ではなかった。

「ん？ どうかした？」

怜子が不思議そうにたずねた。

「その楽譜、モーツアルトの『魔笛』ですね」

怜子は両の目を丸くした。

「あなた、ドイツ語がわかるの？」

「ちょっと前に音楽史の本を読んだんです。それ、一夜の女王の（アリア）じゃないですか？」

「すばらしいわ」

怜子は賞賛した。

そして、何か気づいたようだった。

「あなた、三年C組の葛城涼くんじゃない？」

「そうですけど……」

怜子がかすかにほほ笑んだ。

「あなた、悪いけど、この後、少し手伝ってくれるかしら？」

「いいですよ」

「じゃ、まず、掃除の結果を見るわね」

そう言うと怜子は、涼と連れ立って、音楽室に入った。掃除をした皆は残っていた。

「いいわ。みんな、ごくろうさま。葛城くんはちよつと楽譜を

整理する作業を手伝ってもらいわ。あとの人は帰っていいわ」

皆は一礼して、音楽室を出た。中には、余計な作業を命じられた涼に同情の目を向ける者もいた。

「じゃあ、来て」

涼は、怜子と二人きりで音楽準備室に入った。

9

「ここに掛けて」

怜子は部屋の隅に置かれていたパイプ椅子を取り出してきて、自分の席のそばに置いて涼に勧めた。

「ありがとうございます」

涼はパイプ椅子に腰をおろした。

「あなたのことは知ってるわ」

怜子は、自分も席について、椅子を涼の方へ向けて言った。

「……」

怜子は涼を見つめている。

「数学の久米島先生から聞いているのよ」

涼は一瞬、両眼を細めた。

「あなた、久米島先生とわたしの秘密を知っているんですってね」

「どうして……」

「どうして、そこまで知っているかって？ あなたのクラスの

水島由紀さん、つまり久米島先生の恋人が久米島先生にしゃべったの。わたしは、その話を久米島先生から聞いたのよ」

涼はどう反応するべきなのか、判断に迷った。

「二人でホテルに入るところをあなたに見られていたみたいね。不覚だったわ。あんなホテルに、うちの生徒がいるというのも想定外だったわ」

怜子の両眼に笑みが広がっていくようだった。

「でもね、私の聞いた話じゃ、よくわからないところがあるのよ」

涼は、落ち着きながらも心にある種の緊張を崩さずにいた。

「わたしと久米島先生がどんな関係を持っているか、あなたどうして知っているの？ ホテルに入るところを見ただけじゃ、わからないでしょう？」

涼はかろく唾を飲み込むと話した。

「先生たちの隣の部屋に入って盗み聞きしたんです」

怜子は、両の目を見開いた。

「盗み聞き？」

「はい。あのホテル、壁が薄いみたいで……簡単でした」

「怜子は、怜子の両眼の色は驚きから愉悦へと変化した。」

「あなたって、面白い子ねえ」

「そして、口元にかかる笑みを浮かべた。」

「あなた、女性経験はあるの？」

「涼は少なからずどきつとした。」

「……あります」

「そう。ねえ、わたしとしない？ SMもふくめてだけど」

「涼の胸は高鳴り出した。」

「学校の音楽準備室で、教師が自分の口から生徒を誘うという

状況も、興奮を高めていた。」

「でも……先生には久米島先生がいるんじゃない？」

「大丈夫よ。わたしと久米島先生は、そんな関係じゃないの。」

「割り切った大人の関係なの。あなたにはよくわからないかもしれないけどね」

「涼はどう答えていいかわからず、押し黙った。」

「あなた、女の人にいいじめられてみたいと思つたことはない？」

「笑みをふくんだ眼。」

「あります。いつもじゃないけど」

「そう。いいわね。わたしたち、相性を試してみるのもいいかもしれないわね。どう、冬休み中に一度会わない？ あなた、

受験生だから、そう頻繁にといいわけにはいかないでしょうけ

ど、たまの一日くらい息抜きしてもいいんじゃない？」

「はい」

「食い入るように怜子を見つめる。」

「じゃ、いつにする？ あなたの予定に合わせるわよ」

「だったら、二十六日はどうですか？」

「十二月二十六日。クリスマス次の日ね。いいわよ。あなた、

昼間の方が都合がいいのかしら？」

「そうですね。昼の方が外に出やすいですね」

「じゃあ、午後二時に札幌駅のJRタワーホテルのフロントの前で待ち合わせはどうかしら？」

「JRタワーホテルに入るんですか？」

「涼は気後れを感じた。」

「そうよ。どうかした？」

「いや、値段が高いんじゃないかなと思つて……」

「子供なそんなこと心配しなくてもいいのよ。わたしがおごつ

てあげるから、気にしないで」

「今まで入ったのはベータ・インだけだったが、まちがいなく

安宿だった。格差がありすぎた。」

「じゃ、楽しみにしているわ。そうそう、一流のホテルに入る

んだから、ふさわしい服装で来てね。制服はまずいけど、私服

でもそれなりの格好だね」

「わかりました」

「どうやら怜子は同伴者の服装にも好悪があるらしかった。」

「帰ってもいいわよ」

「あの……楽譜の整理は？」

「もういいわ。自分でやっておくから。じゃあね」

涼は立ち上がった。

「失礼しました」

音楽準備室を出て、人気のない音楽室を通り、自分の教室へ向かった。

10

十二月二十六日は、朝から雪も降らず、快晴だった。その分、ずいぶんと冷え込んだ。

年の瀬の札幌の街は混んでいた。

市営地下鉄さっぽろ駅で降りて、地下街を歩いてJRタワーに向かう。

涼はこれから行われることを考えると、どきどきした。

JRタワーホテルは、JR札幌駅に併設されている高層ビル、JRタワーの一角を占める高級ホテルだった。札幌の中心地に

近いことから、ビジネス客の利用などが多くと涼は聞いていた。

ホテルのフロントは一階にあった。客室は二十三階から三十四階にかけてだった。

フロントの正面に近いソファに腰を下ろして、涼は自分の服装を点検した。



涼は、クラスメイトの男子たちと比べても、あまり服装にかまう方ではなかった。今日の服装は、ボタンダウンの、チェックの入った白いシャツに、アーガイル柄の濃紺のセーター、ブルージーンズだった。それに、茶のダウンコートを着ていた。

腕時計を見る。

午後二時二分。

怜子はまだ来ない。

じりじりしながら待つ。

「ごめんなさい」

五分を回った頃、怜子が小走りでソファに近づいてきた。

「待った？」

「少し」

「ごめんなさいね。支度に手間取っちゃって、家を出るのが遅くなっちゃったの」

「いいですよ。ほんの少し待ただけですから」

「ありがとう。じゃ、チェックインしましょう。部屋は予約しであるの」

二人はいつしよにフロントに立ち、怜子がフロント係に呼びかけてチェックインの手続きをした。涼は、宿帳に記入している怜子を見ながら、怜子が涼のことをどう記入しているのか気になったが、涼の位置からは書いている手元は見えなかった。

鍵をもらって、二人は専用エレベーターに乗った。

怜子はピンクのコートを着て、こげ茶のブーツから黒いタイ

ツがのぞいていた。手には大きめの黒いバッグを提げていた。

「先生」

涼はエレベーターの中で呼びかけた。

「こんな所で、先生はよしてよ」

「はい。じゃあ、冨木さん」

「なに？」

「宿帳にぼくのことも書いたんでしよう？」

「書いたわよ。宿泊者全員の住所氏名を書くことになっているから」

「なんて書いたんですか？」

「万一のことを考えて、久米島の名前を使ったわ。あなたは久米島光司としてこのホテルを利用するのよ」

「今晚は泊まらなくちゃいけないんですか？」

「わたしは泊まるつもりだけど、あなたは泊まるつもり来ないでしょう。終わったら、帰っていいわよ」

その言葉を聞いて安心する自分が妙だった。

涼たちの利用する部屋は、三十一階だった。部屋に入ると、大きなダブルベッドが置かれていて、奥の窓からの眺望がすばらしかった。札幌の市街地が一望出来た。

「さあ、シャワーにしましょうか」

コート類をクローゼットに掛けると、怜子はさっそく言った。  
「葛城くん、先に使っていいわよ」



「わかりました」

涼は、ユニットバスでシャワーを使った。ユニットバスに慣れているので、浴室に設置されているトイレの蓋をお湯で濡らしてしまった。

手触りのいいホテルのタオルで身体を拭きながら、服を着るべきかどうか迷ったが、いきなり裸になるというのもどうかかと思いい、もとのとおり身支度した。

「先生、いや、冴木さん。どうぞ」

涼は浴室から出て、怜子に呼びかけた。怜子は窓際の置かれた椅子に腰かけてくつろいでいた。

「ありがとう」

コートを脱いだ怜子は、少し着古した感じの黒いスーツとミニスカートの上下を着ていた。スーツの襟元からは白いブラウスが見えていた。

涼は、服の上からでもわかる怜子の巨乳に、息を飲んだ。

「ベッドの上にガウンがあるから着替えて待ってて」

そう言うと怜子は、立ち上がって浴室に入ってしまった。

涼は、一人でおぼおぼとベッドに寄った。掛け布団の上に、たたまれた白いパジャマとガウンがふた組ずつあった。そのうちガウンの一つを手取る。高級そうで、いい手触りだった。

着た服を脱ぎ始めた。脱いだ服をベッドの上に置く。ブリーフ一つだけになると、ガウンを羽織った。

部屋の中は、暖房の空調が効いていて、ほどよくあたたかか

つた。

怜子がかけていた椅子に腰かける。

浴室から、シャワーを使う音がかすかに聞こえた。窓から差し込む陽光の中で、涼は両方の目を閉じた。

これからやるべきことを頭の中で反芻した。そうすると、思わず勃起してくる自分に気づいた。

落ち着かないと……。

高鳴ってくる胸を抑えるため、深呼吸した。

11

怜子は五分ほどしてシャワーから出てきた。

「お待ちせ」

バスタオルを胸元から体に巻きつけただけのかっこうだった。涼は、その大胆さにどきりとした。

怜子はベッドのわきに立つと、涼に背を向けてバスタオルをはずし、ガウンを羽織った。バスタオルの下は、やはり全裸だった。怜子の白い背中や尻は、文とはまたちがった性感を感じさせた。怜子は中肉中背で、均整のとれたプロポーションをしていたが、胸の大きさは目立っていた。

「何をじろじろ見てるの」

怜子は笑みを浮かべながら言った。

「やっぱり、気になりますから」

涼はおどおどと答える。

「そう？ 今日は何分にも楽しみましょう」

怜子はそう答えると、自分の持つてきた黒いバッグのそばに寄り、開いた。そして中から色々な物を取り出す。

まず、金属製の手錠だった。つぎに黒い握り柄に何本もの黒い紐のついた道具。そして、最後に光沢のある、四センチ角のビニールの袋。その袋が三つミシン目でつながれており、色は灰色で中身は見えなかった。怜子はこれらを窓際のテーブルの上に並べた。

「これは？」

涼がたずねると、怜子は口元に笑みを浮かべた。

「プレイの道具よ」

手錠を取り上げると、

「手錠はわかるわね。拘束に使うわ。縄を使うのを好む人もいるけど、縛り上げるのに手間がかかるから、わたしはこっちの方が好き」

今度は、黒い柄の道具を取った。

「これは鞭。責め具ね。でも遊び鞭だから、それほど痛くないわ」

そして、ビニール袋を上げる。

「これ、何だかわからない？」

涼は首を横に振る。

「男の子なら知っておかなきゃだめよ。これは、スキン」

skin——皮膚、皮。覚えた英単語が浮かんで来る。

「別名コンドームよ。つまり避妊具。エッチしたときに女を妊娠させないための道具ね。これを男性自身に装着させてから挿入するのよ」

涼は、文の言っていたことを思い出した。

「じゃあ、はじめましょうか」

涼は胸がどきどきするのを感じた。

どんなことをされるのか？

「ガウンを脱いで」

こんな、窓から陽光の差し込む、開放的な部屋で全裸になることに、一瞬抵抗を覚えた。しかし、文とのプレイでも全裸になったことを思い出し、ゆっくりと羽織っていたガウンを脱いだ。

「パンツも脱いで、向こうを向いて」

言われるままにする。

「手を後ろに回して」

怜子はベッドの上から手錠を取り上げる。

後ろの回した両の手首に、手錠をかけた。カチツという鈍い音がして手錠が装着された。両の手首が拘束されるのは妙な感じだった。

「ベッドに向かって上半身を倒して。立ったままよ」

涼は怜子の指図通りに動くマリオネットだった。ベッドに向かって上半身をかがめ、やや窮屈なかつこうになった。

「いくわよ」

いつのまに手にしたのか、怜子は鞭を涼の尻に向かって振り下ろした。

ピシッ。

瞬間的に走る鈍い痛み。

「どんな感じ？」

怜子はにやにや笑っているような口調でたずねた。

「変な、感じです」

「そう？ でも、こんなの序の口よ」

次の瞬間、鞭を激しく打ってきた。

ピシッ。ピシッ。ピシッ。

「あうっ」

涼は思わず声を出した。

「いいわよ。もつと声を出しなさい。ほらっ、ほらっ」

怜子の声を聞いて、涼の頭の中の歯止めがなくなった。

「ああうっ。ああっ」

鞭は躊躇なく振りおろされた。

涼は何度となく声を出していた。

屈従のポーズで鞭を受けながら、涼は自分の中に隷従の快楽とでも言うべき感情が湧き上がってくるのを感じた。自分は生まれながらに攻撃性に快感を覚えるよう遺伝子が操作されていると文は言った。しかし、同時に被攻撃性からくる快感にも理解は示すことが出来るらしい。その証拠に、涼は勃起していた。

液が先端から漏れてきそうだった。それは、解放の快楽とでも言うべき感覚だった。自分はふだん、家庭や学校に守られて暮らしている。それは、庇護であると同時に強力な束縛でもあった。そうした強制や抑圧から自由になっていく感覚だった。すべてをかなぐり捨てて、文字通り裸になる。そして打たれる。それは精神の開放だった。

思わず、身体がベッドに崩れ落ちた。

ベッドに横たわりながら肩で息をする。

「どうしたの？」

「出そうです」

「だめよ。出しちゃだめ」

そう言うとき怜子は自分もベッドののってきた。そして、右足をベッドの外におろし、左足をベッドに上で折って腰かけた。

「お前は本当に、オマンコばかりしたがって」

そう言うやいなや、こんどは掌で涼の尻を打ちすえた。

ピシッ。

「あうっ」

「本当に、ドスケベな子ねえ。お仕置きよ」

さらに激しく。

ピシッ。ピシッ。ピシッ。

これがMの世界なんだ。

涼は打たれながら、どこか冷静に感じていた。

「ううっ」

さらに声を上げる。

勃起している自分自身はいっそう大きくなるうとしていた。

怜子は打つ手を休め、涼の身体に両手をかける。

「さあ、仰向けになつて」

涼も身体を動かして、ベッドに仰向けになった。

「お前は、本当にドスケベな子ねえ。いつも、勉強もしないで、オマンコのことばかり考えてるんでしょ」

怜子の卑猥な言葉の攻勢も、なぜか不自然には聞こえなかった。SとMはブレイのとき、このような一種の言葉あそびをするものかもしれない。

「はい。オマンコのことばかり頭に浮かんで離れません」

涼の口から、すらすらと言葉が出てきた。

「オマンコしたい？」

「し、したいです」

「じゃあ、やらせてくださいって、お願いしなさい」

「オマンコさせてください。お願いします」

「いいわ」

そう言うとき怜子はコンドームの袋の一つを手でちぎり、袋から避妊具を取り出した。ピンクがかった、縮んだゴム風船のように見えた。怜子は器用にスキンを拡げると、涼のいきり立つた陽物にかぶせた。

コンドームを付けるってこんな感じなのか。

涼は初めての感触に少しとまどった。

「いくわよ」

怜子は、ガウンを脱ぎ捨て、ベッドに載って立ち上がり、涼の身体を両足で跨ぐと腰を落としてきた。そして接近すると自分の右手で局部を開いた。ゆっくりと突出している涼自身を入れていく。やがてすつぽりとおさまった。

文のそれとは感触がちがった。

文のあそこよりも締めまりがよかった。

怜子は、ゆっくりと上下に身体を揺らし始めた。自然と結合している局部は刺激された。

「ああっ」

涼は思わず声が出た。

「まだよ。いっしょにいきましよう」

怜子はさらに激しく身体を動かす。

快感は頂点に達しようとしていた。

「いくわ。いくわ。さあ……」

涼は自分自身の内部から精がほとばしり出るのを感じた。怜子は身体を前に倒してきた。そして、挿入したまま涼を抱きしめた。

どれほどそのままでいただろう。

怜子は身体を起こし、接合を解いた。そして、窓のそばのライティングデスクの方へ行くと、デスクの上に置かれたティッシュケースを取って、ベッドに戻った。ベッドの上にあぐらをかくと、ティッシュを取って自分のあの部分を拭き始めた。念



入りに拭き終わると、今度は自分の黒いバッグのそばに寄り、バッグから小さな鍵を取り出す。

「手錠、はずしてあげるわ」

涼は身体を起こし、後ろ手を怜子の方へ向けた。怜子は手錠の輪の部分にある鍵穴に鍵を入れたらしく、かちやりという音とともに、涼をいましめから解放した。

今まで行為に夢中で気がつかなかったが、両方の手錠や腕は少ししびれていた。

怜子は鍵と手錠をベッドのわきのサイドテーブルに置いた。

涼は自由になった手でコンドームをはずした。白濁液が先端につまっていた。ティッシュを使って局部を拭き清めた。

「シャワー、先に使ってくるわ」

怜子は立ち上がって言った。

12

怜子の後、涼もシャワーを使ってさっぱりした。身体を拭いてからふたたびガウンをまとった。

「何か飲まない？ 喉乾いたでしょう」

怜子はそう言うと、部屋に備え付けの冷蔵庫の方へ歩いていった。

たしかに、涼も喉の乾きを覚えていた。

怜子は部屋の冷蔵庫から、レギュラーサイズのコーラを二本

出してきた。

コーラはよく冷えていた。

「こんな寒い季節でも、運動したあとは冷たいものもいいわね」  
そう言つて怜子は笑つた。

涼は、喉の乾きを癒すため、コーラを飲み干した。ペットボトルのピンはサイドテーブルに置いた。そのとき、ふと、置いたピンの形状に目を走らせた。

「先生」

「先生はよしてつて言つてるでしょう。学校じゃないんだから」

「すいません。じゃ、怜子さん」

「なに？」

「もう一度、やらせてくれませんか？」

怜子は流し目で涼の方を見た。

「そんなにやりたいの？ 溜まつてるのねえ。あなた、何日おきくらいにオナニーするの？」

「ふだんは一日おきくらいです。でも、今回は今日のために一週間我慢してきました」

「そう。それはつらかったわね。いいわよ。やらせてあげる」

そう言つて怜子は、持つていたコーラのピンをライティングデスクの上に置き、ベッドに戻つてガウンを脱ぎ始めた。

「さあ、あなたも脱いで、今度はノーマルなセックスを楽しみましょう」

涼も立ち上がつてガウンを脱いだ。

涼の男性自身は、ふたたび屹立していた。

全裸の怜子はベッドに載つて、涼の方へ身体を近づけてきた。次の瞬間、涼は右手でサイドテーブルの上の手錠を取り上げると、左手で怜子の左手首をつかんだ。そして、後ろ手にねじあげた。

「ちよつと、何するの。痛い」

怜子の背後に回り込み、右手の手錠をまず左手首にかけた。

かちやり。無機質な音がした。そして振り回そうとしている右手の左手首をつかまえ、手錠で拘束した。

「いやよ。はずしなさい」

なおも、もがこうとする怜子の肩に手をかけ、ベッドに押し倒す。怜子はベッドにうつぶせになった。

「怜子さん。たまにはMの役をやるのはどうですか？」

そう言つと、涼は形の良い怜子の尻めがけて、右手を振り下ろした。

ピシッ。

いい音が響いた。

「おうっ」

怜子は声を上げた。

「どんな感じですか？」

「信じられない。わたし、男の人を責めることしかしてこなかったのに……」

「役割を交代するのも面白いですよ」

ビシッ。ビシッ。ビシッ。

「おおうつ」

涼は怜子を激しく打った。

白い尻べたはだんだん赤く腫れてきた。

ビシッ。

「おおつ」

ビシッ。

「おおつ」

ビシッ。

「おおつ」

怜子はスパキングだけで果てたようだった。

涼は、怜子の両足を左右に開き、秘所をまさぐる。案の定、

怜子の局所は濡れていた。涼は使いかけのコンドームの袋を取

つてくると、一枚ちぎり、新しいコンドームを出した。そして、

サイドテーブルに置いてあったコーラのビンをつかむと、飲み

口にコンドームをかぶせた。

右手でビンをつかみ、左手で怜子の秘苑を押し拡げる。

「やめて。何するの」

怜子の声を無視して、涼はコーラのビンを挿入し始めた。

「おおつ」

怜子はうめく。

ビンのキャップの付いていたネジの部分が、肉壁にくかべに当たるた

びに、怜子は小さく声を上げた。ビンの先端部分はゆっくりと

怜子の肉穴に入ってしまった。

先端部分が入ったのを見届けると、涼はビンを前後に動かし始めた。

「おふつ。だめよ……痛い……壊れちゃう……」

そんな怜子の懇願を無視して、ビンを動かし続ける。

じゅっ、じゅっ、じゅっ。

怜子の愛液は、しとどに溢れ出てきていた。

さらに激しく動かす。

「おおうつ……おおつ……おお」

怜子も官能を感じているらしかった。

そして、

「……おおつ」

声を上げて、怜子はエクスタシーに達したらしかった。

涼は、コーラのビンを引き抜いた。ビンは床に落とす。

そして、自分自身がふたたび勃起していることを確認する。

怜子の腰を両側からつかむ。

「さあ、尻を上げろ」

怜子は素直に従った。

「こっちへ来い」

涼は怜子をベッドの中ほどに導いた。そして、涼もベッドの

上にひざまずくと、左手の指でさらに怜子のあの部分を押し拡

げた。勃起している自分自身を挿入していく。コンドーム付け

ていなくても躊躇はなかった。

締めりのいい秘穴は、コーラのピンを挿入されて、少し緩んでいた。

涼は動き始めた。

「おおっ。おう」

怜子はまた声を上げ始めた。

涼も快感が頂点に達しようとしていた。

さらに激しく動いていく。

一度吐出していたが、自分は今一度出来ると確信していた。

それほど、涼の精汁は溜まっていた。

「おおおおっ」

怜子も涼も、二人とも頂上へ達した。

涼は、自分の体液が怜子の内部に注がれていくのを感じた。

怜子も満足気な表情で果っていた。

「怜子さん」

涼は結合したまま話しかけた。

怜子がかかる目を開ける。

「ぼくの奴隷になりますか？」

「なるわ。あなたの奴隷にして」

涼は、怜子の言葉を聴きながら、由紀のことを思い出し出していた。

由紀は久米島に支配されている。久米島は怜子に支配されている。そして、怜子は、今、涼に支配されていた。だから、この四人のヒエラルヒーの頂点に立っているのは涼だった。涼は間接的に由紀を支配しているのだった。

女を支配するというのは、こういうことか……。

涼は、自分が重要なことを学習したと感じていた。

了

